

## 安部公房『方舟さくら丸』論

### ——生きのこるための政治と、その衝動の根への遡行

山西 将矢

キーワード：冷戦、本能、群衆、選別、政治

#### 1. はじめに

『方舟さくら丸』は1984年11月に新潮社より書き下ろしで刊行された長編小説である。あらすじは以下の通りだ。「もぐら」を名乗る主人公の「はく」は廃棄された採石場跡を核シェルターに改造しそこで生活している。核戦争後の人類の存続に備え、ノアの方舟に見立てたシェルターへの乗船券[生きのこるための切符]を作成し常に持ち歩いている。ある日街へ出掛けた彼は、ひょんな手違いからデパートの屋上で出会った昆虫屋とサクラの男女を方舟に招き入れることになってしまう。やがて父猪突と彼の営む清掃団体[ほうき隊]など予期せぬ闖入者も登場し、平穏であった方舟生活に「生きのこること」をめぐる波乱が巻き起こされていく。

先行研究の多くは、作中の「現代はシミュレーション・ゲームの時代なんだそう」だ。そこで現実と記号の混同がおこる。一種の閉所願望、トーチカ願望、それに攻撃性が加わったら戦車願望なんだとさ」という文章に基づいて展開されている。

森本隆子は「実は米ソ二大大国の〈核の均衡〉抑止論が演出する安全というシミュラクルに安穏と便乗している日本国家の姿が、かすかに寓意されているのかもしれない」とし、そのような事実にあえて気がつかずに生きるサクラは「シミュラクルの時代の想像力が産み出した核時代の申し子」だと述べている<sup>1</sup>。中野和典は「核抑止論」を「現実に行先するシミュレーションどうしの照応関係」から計算される「全世界をその管理下に組み込む巨大な虚構システム」と見なし、そのような「虚構」に対抗できるのは「現実」ではなく「核抑止論に代わって世界を秩序づける新しい虚構」「対抗的な虚構」だとして、架空の虫であるユープケッチャの表象に注目する<sup>2</sup>。「シミュレーションの時代においては虚構であることにこそ可能性があるはず」<sup>3</sup>だからである。クリストファー・ボルトンも似た視点を共有している。ボルトンは「シミュレーション」やサクラに見られる「意識的な欺き」という形象により、「安部は私たちの生活を規定している日常の常識への批判と、ボードリヤールのように国家それ自体への批判をともに導こうとしている」のだと述べている<sup>4</sup>。さらにボルトンは、物語の終盤で「はく」の足が便器にはまって身動きが取れず物語が「はく」の視点＝読者の視点の「舞台裏」で進行していくことについて、「不安は何も起こらないことから来るので

1 森本隆子『『方舟さくら丸』論—二つの〈穴〉、あるいはシミュラクルを超えて』『国文学 解釈と教材の研究』第42巻9号、1997年8月号、78-79頁

2 中野和典「安部公房『方舟さくら丸』論—脱国家主義の可能性」『近代文学論集』27号、2001年11月、121-122頁

3 前掲、123頁

4 クリストファー・ボルトン「舞台裏の終末—安部公房『方舟さくら丸』論」内藤由直・友田義行訳『立命館文学』652号、2017年8月、188頁

はなく、見えているものの背後で大きな力が動いているかも知れないという恐れから生じる」とし、「こうした小説の状況と80年代の政治的状況との距離はそう遠くない」とテキストと社会状況を接続させている<sup>5</sup>。李先胤もまた、「国家儀式と暴力性がよりスペクタクルな形で日常に定着している1980年代」<sup>6</sup>が背景になっていることに注目している。そして「時間の展開とともに生じる暴力を直視せず、ただ逃れようとする、虚構の閉鎖的空間性」である「ユーブケッチャという幻想」を抱く「ほく」の理想が、「空間の占有、国づくりにより創出される主権に関わる暴力の問題」によって打ち砕かれたのだと論じる<sup>7</sup>。

これらの先行研究に共通しているのは、「80年代の政治的状況」、すなわち米ソ間の冷戦が苛烈化する世界において、安部が「虚構」や「シミュラクル」を肯定することで、今ある現実、核の危機に瀕する国家への批判を行っているという点である。

安部がボードリヤールの著作を実際に読んでいたかどうかはともかくとして、少なくとも80年前後にはボードリヤールの言説が広く浸透していたことは確かである。ボードリヤールは『象徴交換と死』（今村仁司・塚原史訳、筑摩書房、1982年10月）において「いたるところでシミュレーションの時代が開かれる」<sup>8</sup>と書いているが、1981年10月10、11、13日に東京で開催された「ボードリヤール・フォーラム」の前後から「彼の専攻する社会学にとどまらず、経済学、哲学、人類学、言語論、記号論、エコロジー、さらには建築、デザイン、マーケット関係など、多様な分野に属するひとびとがボードリヤールの思想にふれて発言している」言説空間はすでに構築されていたのである<sup>9</sup>。そのため、作中明示される「シミュレーション・ゲームの時代」という言葉への過剰な意味の付与は「ボードリヤールの思想」にとらわれることであり、実際そのような先行論のテキスト分析は理論の当てはめにすぎず、それ以上の結論を引き出せてはいない。

「シミュラクル」、「虚構」が対抗するものとしての核もまた再考されるべきである。

1982年には「核戦争の危機を訴える文学者の声明」が発表され、同年それに対する批判として吉本隆明が『「反核」異論』（深夜叢書社、1982年12月）を刊行する。それらとは距離を取った位置にしながらも、「核兵器によって強いられた意識」により「人間世界がいつ滅びるかもしれないという条件が、私の思考に根をおろしてしまっている」と柄谷行人が言った世相を反映するかのよう<sup>10</sup>、本作にも終末感が漂っている。実際、「ほく」が売っているのは核戦争後に住む核シェルターの乗船券[生きのびるための切符]であり、物語が進行するのは核シェルターとしての「採石場跡」の内部である。しかし肝心な場面で核が明言されることは少ない。冒頭の昆虫屋とのやりとりを見てみよう。

「認識不足だな、危機はすぐそこまで迫っているんだ、新聞読まないんですか」

「すぐって、どのくらい」

「明日でも不思議はないくらい」

5  
前掲、190頁

6  
李先胤『21世紀に安部公房を読む 水の暴力性と流動する世界』勉誠出版、2016年7月、25頁

7  
前掲、184-185頁

8  
ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』今村仁司・塚原史訳、筑摩書房、1982年10月、引用はちくま学芸文庫、1992年8月、29頁

9  
ボードリヤール・フォーラム編『シミュレーションの時代 [ボードリヤール日本で語る]』、JICC出版局、1982年7月、260頁

10  
柄谷行人「核時代の不条理」『朝日新聞』1982年8月12日夕刊、引用は『隠喩としての建築』講談社学術文庫、1989年3月、196頁

「今日じゃなく、明日か」

「譬ですよ。いまこの瞬間かもしれない。とにかく差し迫っているんだ」

「賭けようか」

「何を」

「今から十秒後に」ストップウォッチ付きの腕時計のリューズに指をのせ、

「あんたの言うとおりの危機がくるかどうか、一万円。おれは来ないほうに賭けるね」

前後の文脈からここで言われる「危機」が核戦争であることは推測できるわけだが、「危機」という言葉で表現されるだけで、その内実はほかされている。同様のことは別の場面でも確認できる。

「生きのびるって、何から」

「危機からに決まっているでしょう」

「なんの危機」

「危機に瀕しているとは思わないんですか、自然も、人間も、地球も、世界も」

「生きのびるって、何から……」

女が質問を繰り返す。本当に何から生きのびるのだろう。

前者は昆虫屋との、後者はサクラの女との会話である。「生きのびるって、何から」と同じ文章で二度繰り返される質問に対して、ここでもまた、「ぼく」は「核」と答えていないのである。ただ漠然と「危機」と言うだけであり、女に対しては「何から」かさえ答えることができていない。安部が「『核の廃絶』なんていうけれども、もともと、そうやってきた衝動の根に、問いを発しないかぎり、また繰り返すのではないのでしょうか」<sup>11</sup>と語っている通り、本作で問題にされているのは「核戦争」ではなく、そこにまで至ってしまう人間の宿痼としての「衝動の根」にほかならないのである。

以上のことから、核による人類の危機と、それに対抗する虚構／シミュレークルというすでに先行研究で何度も論じられてきた観点とは別の視点から本作を読むことの必要性が明らかとなる。

よって本稿ではまず、これまでの研究では見逃されてきた、『方舟さくら丸』の発想に影響を与えたであろう作品群との関係を考察する。安部が依拠したそれらの作品は「衝動の根」の探求と不可分だからである。そして、そこから得られた成果をもとにテキスト分析を行い新たな展望を示すことが目的である。

## 11

聞き手・斎藤季夫「方舟は発進せず」  
『安部公房 方舟は発進せず』ミネルバ  
放送批評会、1985年1月、引用は『安部  
公房全集28』前掲、43頁

## 2. 方舟的想像力の世界

「日本という国家を嫌うあまり国家の中に小国家を作る試み」を描いたという

点で本作は大江健三郎『同時代ゲーム』、井上ひさし『吉里吉里人』と共通していると加賀乙彦は述べている<sup>12</sup>。たしかに「国造り」、「創世記の第一章に立ち合っている」という発言がなされ、また「ほうき隊」が「採石場跡」を《代表棄民王国》と呼んでいるように、本作は新たな国家の建設が主眼となっている。あるいはまた便器に脚がはまって身動きが取れなくなる「ぼく」の姿は、『吉里吉里人』において同じく便器にお尻がはまって動けなくなる古橋健二のパロディのようにも読める。だがここで注目したいのは、方舟が国家のアナロジーとして表象されていることである。蘆田英治が書く通り、本作は小松左京『日本沈没』、大江健三郎『洪水はわが魂に及び』と同じくノアの方舟のモチーフを共有している<sup>13</sup>。特に後者はスーザン・ネイピアが「プロットを構成する要素が多く」の点で実によく似ているため『方舟さくら丸』は『洪水はわが魂に及び』の「書き換えだ」と見做すことができる」と指摘するほどに構成が似通っている<sup>14</sup>。他にもノアの神話をモチーフにした同時代の作品として、野坂昭如『オペレーション・ノア』、筒井康隆『虚航船団』、寺山修司『さらば箱舟』などを挙げることができる。とりわけ野坂の作品は、冒頭に『創世記』の該当箇所を挿入し、冷戦下80年代を舞台に、「日本列島に拠る民族が、とにかく生き残ること」を「大命題」に「オペレーション・ノア」という作戦を敢行し、国家を「日本丸」と名付けるなど類似性が高い<sup>15</sup>。また李先胤が指摘するように、安部の初期作品「洪水」、「ノアの方舟」、「壁——S・カルマ氏の犯罪」など「1950年代の小説に多く書かれたノアの方舟というモチーフ」<sup>16</sup>が本作でも活かされている。

このようなコンテクストがすでに形成されていた一方で、安部が本作において国家としての方舟を描く契機となったのはコンラート・ローレンツの『攻撃 悪の自然誌』の影響によるのではないかと推測できる。

安部へのローレンツの影響についてはすでに、佐々木幸喜がエドワード・ホール『かくれた次元』、ティンベルヘン『動物のこぼれ』とともにローレンツの『攻撃 悪の自然誌』が『箱男』（1973年）の「材源」になっていることを実証的に明らかにしている<sup>17</sup>。また安部自身が「もぐら日記」（1985年）において同書を「歴史的名著」と評価していることから、『箱男』以降も依然として関心を寄せていたことが確認できる。真木悠介によると「ほぼ1970年代をとおして、ローレンツの理論は人文・社会科学者の間にも強い影響をもちつづけていた」というが<sup>18</sup>、安部もその例外ではなかったことを以下で検証していく。

佐々木論で詳述されたこれらの書物における「縄張り」概念の影響は、『箱男』に続いて、「現代の最大の「なわばり」が国家」であり、「ユーブケッチャに対応する巨大化した「なわばり」のテーマ」<sup>19</sup>として核が登場することになった『方舟さくら丸』にも読み取ることができる。「組に入っていたころ、偶然ダーウィンの進化論っての読んだことある」サクラが「適者生存」の概念をヤクザに重ね「縄張り争いだけの人生さ」と嘯いているように、ここでは動物の「縄張り争い」が人間同士の争いへと拡張されているのだ。

12

加賀乙彦「国家をめぐるドタバタ喜劇 安部公房『方舟さくら丸』」『群像』40巻2号、1985年2月号、267頁

13

蘆田英治「箱●舟論——「移動空間＝箱」の人間学／桜がサクラになるとき」『遊卵船』1号、2004年6月、82頁

14

スーザン・ネイピア「大江健三郎と二十世紀末における崇高の探求」今井亮一訳『大江健三郎全小説12』講談社、2019年8月、636頁

15

野坂昭如『オペレーション・ノア』文藝春秋、1981年7月。なお、野坂昭如の「終末処分」（1978年）は本作同様「棄民」と「廃棄物」を結びつけて描いており、同時代的な共通性がうかがえる。

16

前掲、25頁

17

佐々木幸喜「安部公房『箱男』試論——ティンベルヘン『動物のこぼれ』との関わりをめぐって」『国語国文』78巻10号、2009年10月、「安部公房『箱男』の材源」『国語国文』81巻6号、2012年6月

18

真木悠介『自我の起原 愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店、1993年9月、10頁

19

「方舟は発進せず」、42頁

たとえば人類と祖先をともしする類人猿には、はっきり二つの傾向が認められる。集団をつくって社会化しようとする拡張傾向と、縄張りにもって城を築こうとする定着傾向だ。人類はなぜかこの二つの矛盾する傾向を同時に身につけてしまった。(…)すでに自然と対等になってしまった人間に、この両刃の剣は重すぎる。巨大な電動鋸で白魚の腹を割くような政治に血道をあげることになる。もしぼくらがユーブケッチャのように……

「類人猿」由来の「二つの矛盾する傾向を同時に身につけてしまった」ために人類は「巨大な電動鋸で白魚の腹を割くような政治に血道をあげること」になってしまったわけだが、この認識は、ローレンツの「水爆を手中に収め、それが人間の守護神となりすましている一方、胸中には類人の祖先から受け継いだ攻撃衝動がくすぶっていて、理性はそれをどうすることもできない」<sup>20</sup>という文章と対応している。先行研究において焦点を当てられていた冷戦にまで至る「政治」の問題が、本作では動物性の次元にまで解体されて描かれているのだ。「政治」もまた動物の「縄張り争い」の拡大した様相にほかならないわけである。

ローレンツにとってなわばり争い、すなわち「種内攻撃のいちばん大切な働き」は「同種の仲間が均一に分布すること」<sup>21</sup>であった。つまり、生活圏が重なれば自ずと生存確率も下がるため、互いのなわばり範囲を守ることが重要なのである。ローレンツのこの認識は、「方舟生活の成否」は「協調ぶりにかかってくる」としたうえで「誰もがユーブケッチャのように暮していれば、協調になんの不都合もないはず」であり、「互いに縄張り拡張の衝動を持たなければ、縄張りを犯し合う気遣いもない」とする「ぼく」の思考に受け継がれている。「ほんの身の丈しかない」「ユーブケッチャの縄張り」のように、限られた自分のなわばりの中でだけ生活していれば、「攻撃」の必要性はなく「協調になんの不都合もない」。

動物同士のなわばり争いを拡大して描かれる「方舟生活」はローレンツの次の文章から発想されたと考えることができる。

かれら [=人類:引用者注] はネズミ同様、閉じた同族の間では社会的に平和に暮らそうとするが、自分の党派でない仲間に対しては文字通り悪魔になるのだ。さらに、この火星の観察者が、人口の爆発的増加とか、武器の脅威の増大とか、人類が二、三の政治的陣営に分かれていることなどをも知ったとしたらどうだろう。かれは人類の未来を、ほとんど食糧もつきた船の上でいがみ合っているネズミの群れの行く末とさして変わらないと判断するだろう。それでもネズミのほうはまだ楽観できる。というのは、ネズミの場合には大量殺りくのとんでもなく、とにかく種を保つにたただけの数は残っているだろうからだ。水素爆弾を使ったあとの人間については、それはきわめて疑わしい。<sup>22</sup>

この引用文のなかには「船の上」「大量殺りく」「水素爆弾」「種を保つ」といった

20

ローレンツ『攻撃 悪の自然誌1』日高敏隆・久保和彦訳、みすず書房、1970年1月、81頁

21

前掲、65頁

22

ローレンツ『攻撃 悪の自然誌2』日高敏隆・久保和彦訳、みすず書房、1970年5月、328頁

『方舟さくら丸』のモチーフが網羅されている。なかでもローレンツからの影響をより証づけるために注目したいのは、決して明るいとは言えない「人類の未来」が「船の上でいがみ合っているネズミの群れ」に譬えられている点である。というのも、本作では方舟のうえで進行する物語の担い手たちがしばしばネズミの比喻によって表現されているからだ。はじめて方舟に足を踏み入れた昆虫屋は「鼠のような歯を見せてのぞき込む」し、舟への侵入者らしき気配について話し合っているときには女が「鼠が出たの」と尋ねたり、「視野の中心部は物の形に強いけど、周辺部は動きに敏感」、「だから鼠も人間も似たように見えるんじゃないかな」という発言がなされ、「ぼく」が方舟内で抱いていた違和感は「《鼠らしいもの》の気配」と表現されている。そして侵入者は「うろちょろ走り回っていた鼠」、[猪鍋]の少年は「跳鼠」と呼ばれ、「ぼく」もまた自らを「勝ち目もないのに針鼠みたいに身構えているぼく」と見なしている。そもそも本作において人間の苦悩は「ネズミやゴキブリ以上の適応力で地上にはびこる力を手にすることが出来た反面、たがいに殺しあう憎悪の才能も手にしてしまった」ことに起因していた。

以上のように、方舟内で起こる人間同士の争いは、ローレンツが書いた「船の上でいがみ合っているネズミの群れ」の変奏にはかならないわけである。しかしローレンツによれば、動物とは違って人間の攻撃衝動は「脱線」してしまっている。

認識の木の実という象徴は、深い真理を含んでいる。ものごとの抽象的思索の結果生まれた認識は、思慮もなく快楽のおもむくままに自分の本能に従って行動することのできた楽園から、人間を追いつめてしまった。周囲の世界と対話をかわしながら試行を重ねていく行為は抽象的思索の産物であるが、それは人間にかれの最初の工具である手斧と火とを与えたのだった。この道具を、かれはすぐさま自分の兄弟を打ち殺してあぶり肉にするのに使った。(…)人間は抽象的思考によって種外の環境を支配する権利を手に入れたと同時に、種内淘汰が自由にふるまうのを許しもしたのだった。<sup>23</sup>

23  
前掲、328頁

ローレンツは人間と動物の最も大きな差異に「ものごとの抽象的思索の結果生まれた認識」を挙げている。「認識の木の実」以来人間に備え付けられた「抽象的思考」は、「種外の環境を支配する権利」を付与すると同時に「種内淘汰が自由にふるまう」ことを「許し」もした。前者の「種外の環境」の「支配」は「すでに自然と対等になってしまった人間」という文章に、後者の「種内淘汰」は「巨大な電動鋸で白魚の腹を割くような政治」という文章にそれぞれあらわれている。「ぼく」が「危機に瀕しているとは思わないんですか、自然も、人間も、地球も、世界も」と言っていたことを思い出そう。「種外」支配及び「種内淘汰」という名の下に、「自然」「人間」「地球」「世界」を「危機」に陥れるまでに発達した「抽象的思考」を持つ人間という存在こそが本作で考察の対象となっているのだ。安部

は本作執筆時に「人類が遺伝子の中に自己意識を組み込んだことは、すでに死への歯車を一回転させたことではなかったのか」<sup>24</sup>と発言している。ローレンツが「抽象的思考」に破局への動因を見たのと同じく、安部は「遺伝子」に組み込まれた「自意識」にそれを見る。あまりに本質主義的なアプローチではあるが、少なくとも本作ではそのような方法が取られていることがうかがえる。

昆虫屋が「人間は本来怠け動物だっていうね。おかげで頭を使うようになって、猿から人間に進化したんだ」と言うように、本作では動物と人間の境界線を曖昧にすると同時に確たる断絶を示しもある。動物行動学に依拠しつつも、人間のみにプログラムされた能力により引き起こされる「死への歯車」の進行が問題とされているわけである。

安部は本作の構想について、「ごくありふれた人間たち、それもごく限られた少人数の中で、群衆の問題であるとか国家の問題であるとか、そういったものを実験してみたかった」<sup>25</sup>と述べているが、ローレンツを取り入れることで達成したのは、「群衆の問題」と「国家の問題」を動物の本能の次元にまで遡行して、言い換えれば、人間のコミュニケーションを動物の交流のアナロジーとしてとらえることで、「危機」の諸相を明らかにしたという点である。すなわち、本作で描かれた「危機」とは、「核戦争」そのものではなく、「二つの矛盾する傾向」と表現された、破局にまで至ってしまう「政治」を行う人間の「脱線」した本能なのである。それこそが「死への歯車」を回転させる「衝動の根」の正体なのだ。

### 3. 権力としての生きのこること

安部が本作で「実験してみたかった」と言った「群衆の問題」にはおそらくエリアス・カネッティの理論が援用されている。1981年10月にカネッティがノーベル文学賞を受賞した直後から、安部はカネッティに言及し始めるのだが、その影響が顕著にうかがえるのは栗坪良樹により行われたインタビューにおいてだ。『方舟さくら丸』の登場人物に共有されている「破滅願望」が話題に上った際安部は、「とくに現代にかぎらず、その磁力がつねに歴史を動かしてきたんじゃないか」とした上で「カネッティが『群衆と権力』で取り上げたテーマでもあるね」と言っている。安部によれば、カネッティは『群衆と権力』において「イデオロギーで組織された民衆とはまったく逆の視点から、群衆の中の一員と化したときの一種の脱皮作用について書いている」という。そして「破滅願望（あるいは再生願望）で集まった群衆は、もはや単なる加算的集積ではなく、一次元高い積算的集積」だとし、「ぼくの場合、書くという行為はその積算の中心点に向って際限なく吸い込まれていく作業のような気がする」と述べる<sup>26</sup>。「破滅願望」で集まった「群衆」は、同質な人間が集まれば同質の集団になる足し算方式ではなく、予期せぬ振れ幅を有した掛け算方式になるということであり、人が集まれば集まるほど動向が予測不可能になることだと言える。部分の単純な

24

安部公房「このごろ——長編小説『志願囚人』に悪戦苦闘中」『毎日新聞』1981年2月23日夕刊、引用は『安部公房全集27』新潮社、2000年1月、84頁

25

安部公房・筑紫哲也「核時代の『方舟』」『波』18巻11号、1984年11月号、引用は『安部公房全集27』前掲、243頁

26

聞き手・栗坪良樹「ご破算の世界—破滅と再生」『すばる』7巻6号、1985年6月号、引用は『安部公房全集28』前掲、137頁

集積が集団の合意になるわけではないのだ。安部にとって「書くという行為」は「その積算の中心点」を穿つことなのである。言い換えれば、同じ「願望」を持つ人間が集まったはずの「群衆」が、はじめの路線から何度も繰り返し脱線して道を逸れていくさまを記述するのが小説だということだろう。

実際、「ぼくには向いてないみたいだ、こういう集団を組織するような仕事」／「集団と言ったって、たったの四人じゃないの」という「ぼく」と女の会話に見られるように、「たったの四人」でも立派な「集団」であり、「ぼく」はその力学に振り回される。あるいはまた「たった七人しかいないのに、酸素が欠乏した水槽のなかで何百匹もの魚があえいでいるような音がしていた」という文章は、ローレンツが魚のなわばりに関する研究を自室の水槽で行っていたことを思い起こすと意味深い。本来なら等分されるはずの「水槽のなか」のなわばりが均衡を崩したために、少人数でありながら息苦しさを覚えることになる。「たった七人」でも「何百匹」に相当するという記述では、「加算」の「積算」へのすり替えが行われている。「群衆」とは人数ではなく人間関係の力学であり、それこそが問題なのだ。

安部が依拠したカネッティの「群衆」とは次のようなものである。

人間たちは一緒になって初めて、お互いの隔たりという重荷から、自分たちを解放することができる。そして、この解放こそ、まさしく群衆の内部で起こることなのである。解放が起こっているあいだ、差別はかなぐり捨てられ、すべての人びとが平等だと感じる。人びとのあいだにほとんど隙間がなく、身体と身体が押しあうほどの緊密状態のなかで、めいめいの人間は自他の区別もつかぬほど他人と近くなる。(…)人間たちが群衆となるのは、誰もが他人より大きな存在でも優れた存在でもなくなるこの幸福な瞬間のためなのである。<sup>27</sup>

カネッティの理論体系において「群衆」は、明確な統率者のいる「群れ」とは異なり、そこに属すると「差別はかなぐり捨てられ、すべての人びとが平等だと感じる」ような場なのである。「めいめいの人間は自他の区別もつかぬほど他人と近く」、「誰もが他人より大きな存在でも優れた存在でもなくなる」状態を希求して人は「群衆」に所属する。カネッティによれば、人間が「群衆」を求めるのは「未知のもの」と接触する恐怖を避けるためであり、突き詰めればそれは死の忌避となる。しかし人は「群衆」に紛れて死の恐怖から逃れようとする一方で、その「群衆」のなかで生きのびるために権力を求める。つまり、「生きのこる瞬間は権力の瞬間である」<sup>28</sup>ということになる。

安部が本作で描こうとしたのは、以上のような「群衆」の崩壊過程であるにちがいない。はじめは「破滅願望」をもとにした集団であったはずの方舟の船員のなかに「生きのこること」に伴う「権力」の問題が入り込んだとき、もはや平等でも均質でもなくなる。つまり「生きのこる者」(カネッティ)を決定するためのゲームとなるわけである。

27

エリアス・カネッティ『群衆と権力(上)』  
岩田行一訳、法政大学出版局、1971年  
3月、9頁

28

前掲、333頁。なお、カネッティ理論の整理については以下を参照：「訳者あとがき」『群衆と権力(下)』法政大学出版局、1971年11月

それが奇妙な形で表れているのが猪突の語るサバイバル・ゲームの寓話である。

サバイバル・ゲームが行われたのは「春の中学の運動会の時のこと」であった。猪突によればこのゲームは、「ぼく」が方舟と呼ぶ「新市庁舎の地下の防空壕をどう利用するか」を決める「研究会の結果」開かれたものであるらしい。「生き残り競争」ではありながら「勝敗はあっても、競争はなし」という一風変わったルールで、「赤、白、青」の中から「出場選手は各自好みの色の旗を目指してゴール」に向かい、サイコロで出た目の色を選んだ者だけが残ることができる。これが何度も繰り返され「最後まで生き残った者が優勝」となる。「一等賞が赤いホンダの新型スクーター」だったために「緊張感も相当なもの」だったが、「五回戦」目から「妙な成り行き」になる。勝ち残った生存者「一〇人」が全員、「ゴール寸前で足をとめ」、「付き添いの肩につかまった病人」である「中風病みがよたよた追い付くのみんなして待って」、その病人が入ったのと「同じ区画」に一齐に「なだれ込んだ」のである。そして同じことが「七回戦」まで繰り返される。猪突はそのような行動を指して、「妙な心理だと思わないか、縁起かつぎというか、群集心理というか、死なばもろともってやつだ」と言い「薄気味が悪かったね」と述懐している。猪突が言うように、「生きのこることは出来ても、これじゃ賞品に手が届く機会はない」わけである。

サバイバル・ゲームにおける「群集心理」は非常に複雑なものだ。はじめはみんな「赤いホンダの新型スクーター」のために「一等賞」を目指していた。つまり、「生き残り競争」を勝ち抜き唯一の生存者になることが目的だったはずである。だがやがて「賞品」そのものは二の次となり、全員が同じ結末を辿ることだけが優先されるようになる。言い換えれば、自分だけが唯一の死者になりたくないために「死なばもろとも」精神を発揮したのである。ゲームが進むにつれて知らず知らずのうちに個々人の目的が「生きのこること」から「死なないこと」、あるいは「みんなで生きのこること／死ぬこと」へとすり替わってしまったのだ。「脱線」した人間が集まれば自ずと崩壊してしまうこのような集団の結末には、本作全体の主題が矮小化した形で表れている。

#### 4. スクラップアンドビルド

それでは、本作において「群衆」を収容する国家である方舟はどのように描かれているのだろうか。

方舟の入口は次のように描写されている。

九メートルの崖の半分ちかくまで積み上げられたゴミの山。さまざまな台所の廃棄物……自転車のサドルにからまっているナイロンの靴下……樽ごと捨てられた漬物……割れた電球のソケットをくわえている魚の頭の骨

……昔は冷蔵庫だった犬の棺桶……ゴム状に溶けた古靴をかぶっている  
コーラの空き瓶……綿飴そっくりの虫の巣がつまったテレビのブラウン管  
……

この「ゴミの山」は、安部が私淑した石川淳の『狂風記』冒頭のゴミ山の描写を  
思わせる。別の入口には「アルミ缶、タバコの空箱、クラゲみたいに地面にこび  
りついたティッシュ・ペーパー、漫画週刊誌、それからもしかしたら使用済みの  
コンドームの干物」といった大量のゴミが「明らかな人間の痕跡」として記述さ  
れている。

蘆田英治が「ゴミと文明の関係に対するユニークな省察が開陳される」<sup>29</sup>と書  
くように、本作を精読すると廃棄物、ごみ、屑についての記述が多いことに気  
がつく。そもそも地下の採石場跡自体「採掘権の放棄」された、いわば「人間の  
痕跡」にほかならない。またユープケッチャは「どう見ても、ゴミのなかを這い  
まわるだけで、名前では呼ばれたこともない虫けらの仲間」と認識されている。  
しかし蘆田はただ「ユニークな省察」と書くだけでその内実を説明することはな  
く、さらに言えば、本作で描かれる「省察」は単なる「ゴミと文明の関係」のみに  
留まらず、ゴミや廃棄物の問題の追求がそのまま人間集団の思索にまで繋がっ  
ていることに関しては等閑視している。

29  
蘆田英治「箱●舟論」、84頁

人が集まれば、物が集まり、物が集まれば、人が集まる。やがて廃棄物の  
始末が問題になってくる。(…)もし遷都も廃虚も避けようとすれば、都市  
設計はまず大マンホールの建設から始めなければなりません。理想の汚物  
処理場は、つまり未来の都市のヘソの緒ってことです。

引用文において「廃棄物」は、「人」と「物」の移動に不可避免的に付き纏うものと  
して記述されている。「遷都」「廃虚」を避けようとすれば、「ゴミ」「廃棄物」「汚  
物」など用済みとなったものを処理するための「大マンホール」が必要となる。  
方舟内においてこの問題は「謎のまま、すべてを流し去ってくれる万能便器」に  
よって対応されているが、これを怠れば「人間が廃棄物に負ける」、「どこかで廃  
棄物が人間を追い越してしまう」と叙述される事態に陥るわけである。それゆ  
え「ぼく」の脚が便器にはまった際にひと悶着起きる。

このような安部の姿勢は、ティモシー・モートンが唱えた「ダーク・エコロ  
ジー」、すなわち「核廃棄物などが捨てられているが見て見ぬふりされる現実の  
暗さを徹底的に見ていこうとする立場」<sup>30</sup>に極めて近いが、安部が視線を向け  
るのは「エコロジー」の領域だけではない。

30  
篠原雅武「訳者あとがき」、ティモシー・  
モートン『自然なきエコロジー 来たる  
べき環境哲学に向けて』以文社、2018  
年11月、450頁

本作において、ゴミの問題と集団の問題はパラレルな関係にある。

サクラは「そりゃ、屑にきまっているさ、[猪鍋]の餓鬼なんて。でも[ほうき  
隊]の爺どもだって似たりよったりだろう。だいたい人間を屑と屑でないのに  
分けるのが気に入らんね。ちゃんと進化論で勉強したのさ」、「屑が肥料になっ  
て木が育つんだろ」と言う。「屑」と「屑でない」のを分けることの目的は、生き

残る生命を「選別」することにある。つまり集団内部でゴミとゴミでない人間を区別することが生命の「選別」にほかならない。

方舟に集まった人間は「棄民」を自称する[ほうき隊]（放棄隊のもじり?）の老人たちにはじまり、「目下指名手配中の身」である昆虫屋、「札付きの踏み倒し屋」であり「捜し屋」に迫られるサクラと、その「相棒」である女、死体や産業廃棄物を廃棄を請け合う「特別廃棄物処理業社」＝[特棄社]を営む「ほく」と千石とといったように、世間の鼻つまみ者ばかりである。「屑人間こそ理想の乗組員」である「方舟」、「年齢とは無関係な概念」と言われる「棄民」によって構成される《代表棄民王国》の住民にふさわしい経歴の持ち主が集まっているわけだ。《代表棄民王国》を「外界から隔離された理想郷」と呼んでいるとおり、ここに集まったのは「外界から隔離された」人たちであり、端的に言えば世間から「屑」と認められた人々なのである。廃棄物同様「見て見ぬふりされる現実の暗さ」に潜んでいる存在のことだ。都市におけるゴミ同様「屑人間」を排除／無視することで社会及び集団は維持されるわけである。しかし、「逃走犯人や気違いだって、やはり人間」であるのだから、ゴミのように廃棄することは許されない。

[ほうき隊]と「ほく」は方法が異なるにしろ、「棄民」として排除された人々が、来たるべきカタストロフィの後の世界を再建するために必要な人間を逆に「選別」することを目的にしていた。ここには「棄民」が「棄民」を生み出すという転倒と同時に、「生きの瞬間」をめぐる「権力」の問題の攪乱が見られる。また、サバイバル・ゲームの寓話において、期せずして集団を率いる役目を担ったのが「足手まとい」と描写される「中風病み」であったことを思い出そう。おそらくは「屑人間」の方に分類されるであろう「病人」が、「屑でない」人間たちを導くという転倒した図式が象徴するように、新たな国家の舵を握るのは「屑人間」の方なのである。しかし乗組員が「屑」であろうとなかろうと、ローレンツから出発シカネッティを経て到達した、種としての人間が構成する群衆のメカニズムに差異はないのである。冷戦下において対立していたアメリカにしろソ連にしろ、あるいはまた《代表棄民王国》にしろ、その構成員が人間である以上主義主張は異なれど「群衆の問題」と「国家の問題」は避けられないのだ。そしてそれは、「縄張り争い」の拡張した形態である「政治」の問題に帰着する。

## 5. 声のポリティクス

「ユーブケッチャは独り言の世界である」と「ほく」は言う。そのようなユーブケッチャにシンパシーを抱く「ほく」は昆虫屋とサクラと女が来たとき次のような癪癪を起こす。

「たのむ、静かにしてくれないか」もううんざりだ。乗組員との共同生活がこんなにわずらわしいとは思ってもみなかった。「ずっと他人の声なんか聞かずに済ませてきたんだ、神経にこたえるよ」

「共同生活」を営む限り「他人の声」の介入は不可避である。しかし、それまではユー・ブ・ケッチャのように「独り言の世界」に安住していた「ぼく」はそれに耐えられない。「男たちの眠たげだが陽気な笑い声」を聞いて「われながら自分の陰にこもった性格にうんざり」しているし、無線越しに猪突の「風邪をひいた象のような声」を聞いただけで拒否反応を起こす。おまけに「採石場跡」は「声がびんびん響く」。「ぼく」にとって「共同生活」とは何よりもまず「他人の声」と折り合いをつけることなのだ。それに耐えられず過剰な「懲罰システム」を張り巡らせて「三年ほど前から洞穴暮らし」をしていた「ぼく」は、昆虫屋とサクラから「繰り返し排他性を指摘され」る。「ぼく」が否定しようと、そのような態度は傍から見れば「人間嫌い」であり、「帝王」による「王政」あるいは「独裁者」による「独裁」と本質的に変わらない。「ぼく」の行為は「他人の声」の排除であり、「声」の独占なのだ。無論ここで言う「声」とは物理的な音声だけではなく、信念、思想、意見の異なる他人から発せられ融和と反発を生み出すものとしての「声」でもある。

「政治」もまた「他人の声」との折り合いであることは、「ぼく」をはじめとした方舟の乗組員と「ほうき隊」との間で繰り広げられる「戦争」、「戦争ごっこ」において露呈する。「ほうき隊」の副官との交渉に際して昆虫屋が「なんとかお互い納得し合えるように、まとめてみるつもりだから……」と言った時「ぼく」は次のように考える。

もっと昆虫屋らしい、舌先五寸の論法を期待していただけに、気抜けしてしまった。副官の前でこんな有様では、先が思いやられる。昆虫屋はどんな手順で、短時間のうちに隊長の座を獲得できたのだろう。拳銃で猪突を射殺しただけなら、猿山のボス争いと変りない。

「ぼく」が昆虫屋に「期待」していたのは「舌先五寸の論法」で副官を丸め込むことであった。なぜなら「拳銃」で「射殺」して地位を得ることは「猿山のボス争い」と大差ないからだ。「猿山のボス争い」とはいわば動物の「縄張り争い」にほかならないわけだが、そのような武力闘争を調停するために必要なのは「お互いに納得し合える」ように声を交わすことである。言い換えれば、「他人の声」と自分の声を「まとめ」ることだ。「ぼく」が求めたのは、「猿」から進化した人間のみ可能な、言葉による「縄張り争い」の解決であった。

しかし「王政や独裁は、性に合わないんだ」と言う「ぼく」に対して「船長がおっしゃりたいのは民主化のことでしょう」、「民主化というのは、個人の生産効率を高めるために、国家がやむを得ずとった便法にすぎません」と副官が反論するように、「民主化」による調和はうまくいかない。「ぼく」の「参謀、兼、用心棒」であり「暴徒鎮圧という特殊技術の心得」を持っていたはずの昆虫屋が、敵対する「ほうき隊」の隊長に就任した結果、次第に「変調」を来たしてしまうからだ。もとより「ほうき隊」は役職により異なる色のバッヂをつける階級制の組織であった。「民主化」を目指していた方舟と猪突をトップに置く「独裁」の

「ほうき隊」は組織運営のレベルで対立していたのである。隊長の役割の過剰な演出を諷めた「ぼく」に、昆虫屋は「命令する立場か、される立場かで、えらく違うんだな」、「自動車の部品と、運転する人間くらいの差はあるね」と応答する。昆虫屋は「子供のころから団体行動が苦手」だったと言うが、彼にとって「団体行動」とは「自動車の部品」になることであり、いわば他の「部品」との間で調和を図ることを指していたはずである。だがはじめて「運転する人間」の側に立つことで昆虫屋は「ほうき隊」の行動規則を受け入れ階級制に則った組織運営を行う。それゆえ「ぼく」と「ほうき隊」の争いは平行線を辿っていくことになる。「民主」と「独裁」というこの対立は、「政治」の問題へ至ることは避けられない。本作における「政治」とは核シェルターとしての「採石場跡」の主導権を握ることであり、ひいては「生きのこること」へと直結していた。

「たしかに、面白いよね、政治は」というサクラの言葉に対し、副官は「支配する立場に立てば、こんなに面白いものはありません」と答える。副官にとって「支配する立場」とは「生き残る人間」を「選別」すること、すなわち「生殺与奪の権」を握ることである。カネッティにおいて「命令」とは「執行を猶予された死刑判決以外の何ものでもない」<sup>31</sup>わけだが、昆虫屋と副官が「命令」、「支配」にこだわるのは、他者に「死刑判決」を下す側の立場でありたいからである。「ぼく」はそのような「ほうき隊」の論理に嫌悪感を催すが、次第に「無意識のうちにぼくがとってきた行動と、瓜二つなのだ」という事実に気がついてしまう。実際、方舟への乗船券である「生きのびるための切符」を「売りしぶっていた」「消極性」は、「内証の死刑宣告帳にサインしつづけていたのと同じこと」であり、「どっちが残忍だったか、判定は微妙」であるが、少なくとも「「ほうき隊」を非難する根拠は失われてしまった」。なぜなら「ぼく」の行為もまた「命令」と同様「死刑判決」でしかないからである。そのため最後に「ぼく」は「誰が生きのびられるのか、誰が生きのびるのか、ぼくはもう考えるのを止めることにした」のであった。どのような体制であろうと、思想の異なる人間同士の多様な「声」の交錯を「まとめ」ないかぎり、集団は瓦解する定めにある。核戦争とはその原因でなく結果にすぎない。

31

カネッティ『群衆と権力(下)』、312頁

## 6. おわりに

「ほうき隊」と「ぼく」、「独裁」と「民主」という相反する行動原理を有する異なる集団が、多様な「声」が行き交うなかで、結局は同じ筋道を辿り同じ結末へと辿りついてしまう本作のプロットが示しているのは、果たして「政治」に対する安部の諦念だろうか。

おそらくそうではない。本作において自他の「声」を「まとめ」ることと「命令」することは互いに相反していたわけだが、この対立を安易に「独裁」と「民主」、「共産主義」と「自由主義」、あるいはソ連とアメリカという政治体制に還元して

はならないだろう。カール・シュミットは政治の本質を友と敵の区別、すなわち誰が味方で誰が敵かを見定めることと定義している<sup>32</sup>。しかし本作において友／敵の区別は流動的であり、政治とは端的に屑と屑でない人間を選別することとして考えられていた。選別の基準を決めるために、言い換えれば、生きのこの生命を選別する側の人間になるために政治を行うわけである。そこに民主も独裁も関係がない。ただ「命令」するか「声」をまとめるかの違いがあるだけだ。確かに本作では「声」をまとめることに失敗してしまう。しかしそれはたった一度きりの決断というわけではない。

物語の終盤、「ぼく」がダイナマイトによって出入口を塞いで採石場跡を外部から隔離し、疑似的に核戦争後の世界を作り出した直後の場面を見てみよう。

とつぜん千石が拳を手のひらに叩きつけて叫んだ。

「だったら、おれたち、生きのびられたんだよ」

照明が消えて、サクラが階段を降りてくる。

「死なずに済んだだけじゃないの」女が困惑気味に言い返す。

「おれたち、生きのびたんだよ」千石が涙声で、鼻をすすった。

「大変なのは、生きのびた後です。生き続けなけりゃなりませんからね」

副官がライトで千石をひと撫でした。

ここでもまた「声」の交錯が読み取れる。つまり、千石の「生きのびられた」、女の「死なずに済んだだけ」、副官の「生き続けなけりゃなりません」という三者三様の「声」が。誰が一番正しいのかは重要ではない。重要なのは、いかに「生きのびた後」の「大変」さと向き合うかということである。なぜなら生き続けるかぎり何度でも政治の問題は回帰し、幾度でも決断を迫ってくるからだ。ゆえに必要なのは「誰が生きのびられるのか、誰が生きのびるのか」を考えることではなく、生き続けること、そして生き続ける限り終わることのない「声」の衝突と融和を経て、異なる政治の在り様を模索し続けることである。

ローレンツとカネッティを参照することで展開された政治をめぐる考察が、単に核戦争の是非を問うものでないことは明らかである。国家間の戦争を動物の縄張り争いの次元にまで遡行して考え、核戦争に至る政治に血道をあげる人間の「衝動の根」を解き明かすことが、新たな活路を開く契機になり得るはずだという可能性を安部は信じていたのだ。

本稿におけるこのような読解は、「核」「国家」「戦争」といった「現実」に対して安部が「虚構」を定立し、それらへの抵抗を目論んでいるとした先行論とは異なる見解を示している。安部は「現実」と「虚構」を対立させたのではなく、むしろ「虚構」を通して「現実」を再編する方法を模索していた。その際、安部が思考の対象としたのは「核」「国家」「戦争」ではなく、その原因である人間であった。人間の「衝動の根」を解明しないかぎり、危機は何度でも繰り返されるからだ。

文学者たちの間で「核」に関する言説が飛び交うなか、安部は、己の感覚だけを頼りに穴を掘り進むもぐらのように孤独な思索を続けた。その結果描かれ

32

C・シュミット『政治的なものの概念』  
田中浩、原田武雄訳、未来社、1970年  
1月

た本作は、鳥羽耕史が「手で触れることのない、砂の穴の外側の政治状況にはもうコミットしないという安部の決意表明」であり、「運動体・安部公房の終着点とも言える小説」<sup>33</sup>とした『砂の女』(1962年)以降の安部の「政治」を示す、極めて重要な作品である。

33

鳥羽耕史『運動体・安部公房』一葉社、  
2007年5月、278-279頁

[付記] 本文引用はすべて『安部公房全集27』(新潮社、2000年1月)に拠る。なお、引用に際してルビ、傍点等は省略した。